

| 音順  | 方劑名                              | 生薬構成 および製法・服用方法  |
|---|----------------------------------|--|
|   | 傷寒論・金匱要略条文                       | 読み および解説・その他   |
| きー2   | <p><b>桔梗白散</b> (外台)<br/>(白散)</p> | <p><b>桔梗</b> (辛微温) 3g・<b>貝母</b> (辛平) 3g・<b>巴豆</b> (辛温) 1g</p> <p>上の3味を粉末となし、合わせて散となし、強壯な人は1回に0.5gを服用し、体力の弱っている人とか、疲れて痩せている人は少し量を減じて服用させる。病が横隔膜より上焦のあるものは、膿や血を吐くし、下焦にあるものは膿を下す。もし下ることが多くて、なかなか止まらない時には、冷水を一杯服用すると下りが止まる。であるから<b>巴豆</b>剤は湯で服用することが必要である。</p> |
| <p>弁太陽病脈証併治下第七第 14 条 (傷寒論)</p>  |                                  |  |
| <p>「病、陽に在れば常に汗を以て之を解すべきに反って冷水を以て之を撰き、若しくは之に濯げば其の熱却かされて去るを得ず。いよいよ更に益煩し、肉上粟起す。意に水を飲まんと欲すれども、反って渴せざる者は<b>文蛤散</b>を服す。若し癒えざる者は<b>五苓散</b>を与う。寒実の結胸、熱証無き者は<b>三物小陷胸湯</b>を与う。白散も亦服す可し。」</p>  |                                  |  |
| <p>まさ、もつ、げ、かえ、反って、撰き、濯げば、おびや、却かされて、ますます、ぞつき、こころ、も、またふく、べし</p>   |                                  |  |
| <p>解説 病邪が表にある時には、発汗によって病を解すべきであるのに、熱いからといって冷水を口に含んで病人の体に吹きかけたり、又は濯ぎかけると、寒湿が体表に鬱滞し表邪が体表より発散せず、表にこもった熱が取れなくなって、表邪がまだ化熱していない状態が一層ひどくなって熱のために苦しがるようになる。そのために肉上粟起(皮膚に粟の粒の様なもの(鳥肌)が全身又はあちこちに出来てしまうこと)を生じる。そして気持では水を飲みたい様な感じがあるが、反って水は飲み込めない様な者には、<b>文蛤散</b>を服用させて軟硬化痰させるとよい。<b>文蛤散</b>を服用しても治らない場合は、冷えが強く邪が深く下焦まで進入して、膀胱の気化障害を起こして口渴、小便不利になってしまったもので、この様な場合には、<b>五苓散</b>を与えてやりなさい。その場合に、表を冷やした寒が内に入りこんで、熱が胸の中に追い込まれて結する様になり、熱発の証が無いものには、三物より出来ている<b>小陷胸湯</b>を与えてやりなさい。この場合に<b>白散</b>の証があれば、また服用してもよい。</p> |                                  |  |
| <p><b>桔梗白散</b>は、胸中に熱が入って、この場合肺癰を起こす証に用いる。</p>   |                                  |  |
| <p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>   |                                  |  |
| <p>裏に熱があり口渴が無い者は、寒が表にあるので、<b>文蛤散</b>を与えて表中の水寒の気を散ずればよい、水と熱が相搏って裏に伝えようとするために癒えざる者は、<b>五苓散</b>で胃に入った虚熱を除き、表を発してやり、もし始めに水をかけてから急に胸中が苦しくなり、発熱や渴が無い者は、始め熱が表にあったものが水寒によって、この熱を発散せず外泄することが出来ず、熱が裏に内攻し、胸中に結ばれて結胸を起こし心下鞭するものを<b>三物小陷胸湯</b>で治す。もし結ばれざれば<b>白散</b>の証である。</p>  |                                  |  |
| <p>「病が陽に在る」は、病邪が表に在るということである。そして表に熱が集まり煩を生じているのである。この場合には、表を温めて発汗により表に在る病邪を解すると共に煩も除かれるのである。ところが温めて発汗させるべきところを反って冷水を口に含んで病人の体に吹きかけたり、濯いでやったりすると、腠理を閉めてしまい、そのために熱気が一時的に内に入るが、しかし、また表に戻り煩がひどくなり、その勢いが劇しくなって汗穴を押し広げるために、肌の表面に粟粒の様に水泡とか吹き出物が出来るのである。</p>  |                                  |  |
| <p><b>文蛤散</b>は、発汗すべき水分が、発汗できずに滞っている証に用いる。その血に熱を持って渴が現われるもので、その血の熱を平らげて、血に潤いを与えてやる働きがあるものと思われる。</p>  |                                  |  |
| <p><b>文蛤散</b>の場合は、表証がなく、裏の上焦に熱が入ったもので、渴が現われるのが理にかなっている。<b>五苓散</b>の場合は、裏に熱が入っても、まだ表にも熱があり、表熱は外に出ようとして、裏熱は更に胃に入ろうとしているために渴を生ずるのであると思われる。ところが表が冷えてしまって熱が完全に裏に入り、胸中に結ばれてしまうと結胸を起こしてしまうのである。</p>   |                                  |  |
| <p>熱証が強い場合は、熱が陽明の胃に入り胃熱が盛んになり大煩渴となる陽明胃熱の証となる。</p>   |                                  |  |
| <p><b>文蛤散証</b></p>  |                                  |  |
| <p>新古方薬囊によれば「身体に熱があつて、汗は出ず、寒気もあり、無理に水を飲みたがるもの、但し此は、風邪の初期などに自然に発する証候に非ず、無理に熱を体内に追い込んだりした時に多く発する証状なり。注意あるべし。また平常胃が悪く、食欲はあれども多く食することが出来ず、むやみに水を飲みたがり、幾ら飲んでも呑み足りない者。」と記されている。</p>   |                                  |  |
| <p><b>文蛤散</b>の証は渴があるけれども、この条文では渴せずとあるのでおかしいと思われるが、条文では発汗すべきをさせないために、いろいろの病証が出るのであって、体内には水分があるために渴は生じないだけであるから、<b>文蛤散</b>でよいのである。</p>  |                                  |  |
| <p><b>五苓散証</b></p>  |                                  |  |
| <p>新古方薬囊によれば「熱があつて、汗が出て、咽が渴いて水を欲しがり、小便の出ない者。小便少なく、咽が渴いて水を飲み、水を飲めば忽ち戻す者。非常に水を欲しがりてうるさく、小便の利せざる者。頭や体に痛みがあり、熱があつて悪寒し、汗出でて咽渴き、激しく水を飲みたがり、飲めばまた吐く者。本方の一番の目標は、渴と小便の不利とに有り。」と記されている。</p>   |                                  |  |
| <p><b>小陷胸湯証</b></p>   |                                  |  |
| <p>新古方薬囊によれば「小結胸の病は、まさに心下にあり、之を按ずれば即ち痛み、脈浮滑なるもの。」と記されている。</p>   |                                  |  |
| <p><b>桔梗白散証</b></p>   |                                  |  |
| <p>新古方薬囊によれば「咳多く息苦しく胸中脹り、熱が少ない割に寒氣劇しく、咳する毎に痰が出て、久しく癒えざる時は、臭味のある痰を吐く者あり。胸中が脹り痞えて息苦しさが本方の特徴なり。」と記されている。</p>   |                                  |  |
| <p>肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 19 条 (金匱要略)</p>   |                                  |  |

「外台 桔梗白散、咳して、胸満、振寒して脈数、咽乾きて渴せず、時に濁唾腥臭を出だし、久久なれば米粥の如き膿を吐する者を治す。これを肺癰となす。」

解説 外台の桔梗白散は、咳が出だすと胸が一杯になって苦しく、悪寒がしてブルブル震え、脈が数となる。咽は乾く様な感じはあるが口渇は無く、そして時々濁った痰や、臭気のある痰を吐く、このような病状が久しい時には、米粒のような膿の塊の混じった痰を吐くようになる。これは肺癰である。

胸苦しく、咳、悪寒、脈が数などの証があって、臭いのある痰を吐く程度であれば桔梗湯で主治するが、重症になって米粥のような膿痰が出るようになれば桔梗白散が主治すると考えられる。

肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 12 条（金匱要略）

「咳して胸満、振寒して脈は数咽乾して渴せず、時に濁唾腥臭を出だし久久、米粥の如き膿を吐する者、肺癰と為す、桔梗湯之を主る。桔梗湯の方亦血痺を治す。」

解説 咳が出て、胸が一杯になって、苦しく寒気がしてガタガタと震えて、脈は熱を表わす数である。そして咽がカラカラになるけれども水は飲みたくない。時々生臭い濁ったつばを吐き出す。長くこのような状態が続くと、飯粒位の膿のかたまりが痰の中に混じって出るようなものは肺癰である。桔梗湯が主治する。桔梗湯は、また血痺の病にも奏効する。

「方剂決定のコツ」の注釈

肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 19 条（金匱要略）の桔梗白散の条文と、肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 12 条（金匱要略）の条文と同じであるが、病理が異なる。

桔梗白散は、桔梗湯（桔梗・甘草）の甘草の代わりに貝母・巴豆を加えたもので、桔梗湯の場合は、表虚があつて陽気を発することが出来ずに、陽邪が少陰の経に伝わり咽痛を起こしたものであるのに対し、桔梗白散の場合は、胸腹内の異常な停滞物により穀道が遮られて下に通じることが出来ずに上に向かい、胸満短気を起こすもので、停滞物が下れば肺熱が去るのである。

辛微温の桔梗と、辛平の貝母で肺中の鬱滞を散じ、辛温の劇物たる巴豆で癰塊を破壊して吐出せしめる。

邪熱が胸にこもって、水と結ばれて結胸を起こした場合は、小陷胸湯証であるが、結せざれば桔梗白散証となる。

桔梗湯の悪寒は、傷寒の悪寒とは異なり、内熱のために腠理が開くことによる。

桔梗湯の用いる範囲は広いが、その源は少陰の経にある。

肺癰とは、咽喉に熱と寒が入って閉ざされて肺の熱が外発することが出来ず、肺中に熱がこもり、そのために咳が多く出て、その時に胸中が痛み、膿の如き濃い痰を吐き、身体に熱があるものをいう。